

出雲の古代
加藤物心

古事記の神代巻の三分の一以上
が、出雲に關係する神話で占められ
て、いるのは、深いわけがあるにち
がいな。しかし、それがそのま
ま、大和勢力に匹敵する強大な勢力
が出雲の古代にあつた事には直接
結びつかないと思ふ。古墳を中心
とする遺跡や遺物を見て、吉備
のそれに及ばないし、畿内のそれ
とは比較にならぬほど貧弱だから
である。

出雲の古代を知るには、天平五年
に、二月三十日勘定とある「出雲風土
記」(733年)によろほかはないが、読んで氣
づく。一、二の事について記するこ

(一) 古代出雲の中心地は意宇郡、即ち現在の松江市を含む東部地域である。その理由には出雲の国九郡のうち、意宇郡が最初に挙げられてくる。また、八束水臣津命による有名な國引の話も、意宇郡の名の由来を語る大曾穴磐持命が越後天守下を造り給うた大蛇を平らげて還られたのも意宇郡である。神社名が全部で三百九十九社記載されており、意宇郡の熊野大社と出雲郡には百十九社あり、断然社数が多く、出雲郡が神社の郡であるが、これを示している。また八束築水臣津野につけられた。これは杵築郷の記事に、

發行會
備陽史探訪

十月例会へ向け
出雲特集号

発行所
福山市西深津町
1863-2
神谷和菴方

(2) 備陽史探訪

1983年8月30日

命え國引給後天の
將造奉而諸皇神等參集宮廬杵築故
云寸付ニある。熊野大社が意宇
郡の大社であるのに對して、杵築故
大社は出雲國の大社であるたので
ある。
なお、出雲風土記には見えぬが
、昭和四十五年まで三年間の發掘
調査で、出雲國庁の遺構が現在の
松江市大草町の六所神社付近に確
認された。万葉集卷三371には
認されたり。出雲守門部王思涼歌一首
原え乳鳥汝鳴者吾佐保河
乃所念國とある。今の中海に注
ぐ河原の千鳥に望郷の念を訴えた
王族の国司が神龜元年(四百)頃居たの
である。この国府跡に何時か立ち
たつて思つ。

出雲と佐々木氏　田口美え

中世の出雲を語る時、忘れてはならないものに佐々木氏があります。戦国時代、陰陽十一州の大守として名を馳せた尼子経久も仮名手本忠臣戸有名な塩谷判官も共に佐々木一族です。

みなさんは佐々木氏といふ乙宇治川の先陣争いの佐々木定綱、高綱兄弟を思い出されるでしょう。この兄弟の末弟に佐々木義清という者がいました。そして、この人物は出雲国守護え次第によると鎌倉時代の初めに出雲の守護に任せられたのです。すなわち、鎌倉時代佐々木氏一族が同氏一族が戦国時代までこの国で活躍するようになつた原因なのです。鎌倉幕府の世になる乙関東武士達

は守護や地頭として続々と自分達の植民地西国へ移住して行き、佐々木氏は元々近江の武士ですが定綱兄弟やその父秀義は平治の乱に敗れてからは相模国に居住し、了良いです。守護として出雲に入国した佐々木氏は一族兄弟を次々と国内の各地へ分家させて云々を国内を治めました。今、「佐々木氏」系図を見ます。そのような分家として、野木、塩谷、富田、広田、湯原、古志等々がありますが、これらはみな出雲国内の地名です。彼等は国内の各地に居住し、附近を開拓して、在地の地名を取り、附近の苗字としたのです。みんなのお手元に鳥根県東部の地図がありましたが、これらの中から下さるでしょう。関東武士は一面農業経営者です。

彼等の活躍により、古代の神々の祭祀は拓かれて行き、やがて近世から現代へと青々とした美田を子孫に残してくれたのです。武士のうえで、華々しい合戦物語りを思い浮べがちですが、このような面も忘れてはならないことです。

尼子氏

佐藤洋一

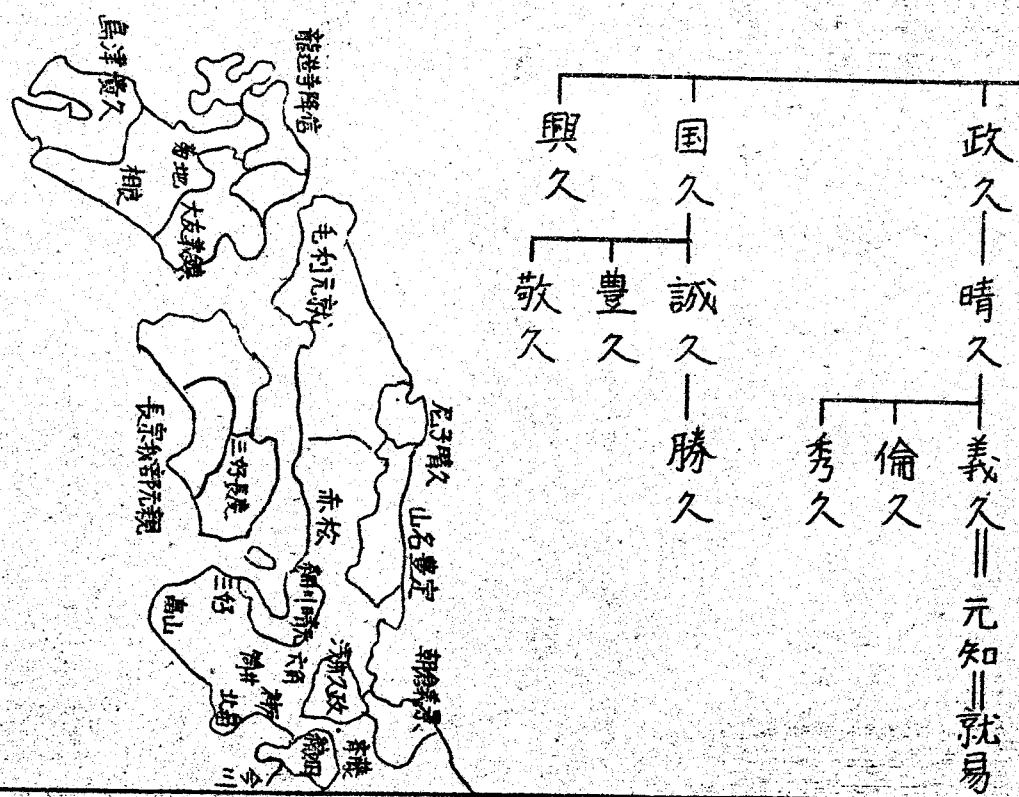
宇多源氏の近江源氏佐々木氏の族で、室町・戦国時代の大名。佐々木京極道誉の三男が出雲、隠岐の守護高秀。高秀の次男高久は近江犬上郡甲良莊尼子郷に住んで尼子氏を称した。その次男持久が京極氏の出雲守護代として、雲州尼子の祖となる。その子清定は応仁の乱中、富田・飛騨の基礎を固めた。次の経久の追放されたが、文明十八年(一四八一)月山城を拠点に国人を抑え他日雄飛

(4) 備陽史探訪

1983年8月30日

元城を奪還、出雲を中心^トに領国を拡大し、山陰、山陽十一ヶ国の太守と兵を交えた。長子政久戦死し、孫晴久は八ヶ国守護。晴久の次男義久のときの永禄九年(一五六六)富田城落城、毛利氏に降^ルた。その後、支族勝久が遺臣山中幸盛らに擁立。これ尼子氏再興を図り、羽柴秀吉の先陣をして播州上月城に拠^ルたが、毛利氏の攻囮をうけ、天正六年(一五七八)七月三日に自刃して滅亡した。なお、出雲では「あまた滅亡した」とい^うところである。

【おもな戦国大名 永禄初年(1560年前後)】



鉄製鉄と近代製鐵

立石雪夫

日本の近代製鐵は一八九六年(明治三十)、官営幡製鐵所創設頃から始まるのですが、それより前千数百年に亘って日本人の歴史を支えてきた鐵は、すべてたたら製鐵によるものでした。今日たたらについて知っている人は案外少ないので、今回備探の会(備陽史探訪の会)長たるしの会で私は勝手に略称「五十日の一泊例会」で出雲地方を探訪、日本で唯一、一括遺構の現在する吉田村の菅谷たら、他の他を見学されることは得難い機会だと思います。

一、釜リ耐火法を講じたたら製鐵法	二、高炉(溶鉱炉)耐火煉瓦でトックリ型に築いた炉。
二、原料リ花崗岩などが風化して分離した砂鐵(川砂鐵、山砂鐵、浜砂鐵)	二、鉄鉱山から堀り取った鉄鉱石(磁鐵鉱、赤鐵鉱、褐色鉱等)その他石灰石等。
三、燃料リ木炭。釜の中へ砂鐵と混じ火をかけ風を送り木炭を引き続きつぎ足す。	三、コークス等。原料とコークスなどを炉に入れて送風する。
四、炉への送風リ足ふみ鞴による。(後には水力鞴も考案)鞴はたたらと高殿をもたらす	四、高炉のそばにつくられた熱風炉から高熱の風を送る。燃料はコークス等。

ら後には製鐵工場を一括してまた、兵庫に移す。

五、鉄の製造工程

リ、鉄の製造工程
た鐵(銛を)ずく、
鋼をけら、とりう、
玄釜をこわして、
取り出し、破碎
し、類別し、こ
れを大鍛冶屋に
送り、類別された
素材を鍛錬しなき
が、鉱滓を除き、
用途別の鉄材を
つくる。 村や町の
(小鍛冶)は其の
材で農具工具の
物生活用品等の
製品をつくす。
地、立地リ砂鉄産
山

五、最近は高炉を

、最近は高炉から溶融した後の鐵（鉄）を、転炉、平炉、電気炉等に送り、更に圧延工程を経て用途別の鉄材をつく

井上良三
美保閣と聞いてまづ頭に浮かぶのは船酔い。中学生の頃に一度行きた事がある人ですよ。渡船で船酔いに会い、ゲエーと吐いた苦い思いを出しむないので、美保閣のことを書いてくれと言われて、何を書こうかと迷う次第です。

ですが他には、と強いて思ひ浮かべると、閣の五本松、一本伐りや四本とふりう文句は知つていますが、悲しいかな、市民会館の職員としての私は、毎度く調子外の民謡大云には辟易として活



(7) 備陽史探訪

1983年8月30日

時 小舟に乗り込んでは
誰かしきりに話していふよ
うです。でもその声もだんだん小さ
く聞きとれなくなつてしまいまし
た。まるで何かの呪文でも聞いて
る様なゆうたりしたい気分を。



とにかく我が鞆港のごとく、榮之
さじれた所と思われた。
他には平安中期に開山されたと
言わかれている、仏谷寺というのも
有名である。
まあ、ガアーとこんな具合で美
保関の説明を終わるとしよう。
では、秋の旅行が楽しくありま

本日は六十餘人がマイクロバス二台を連ね、矢掛、真備町の歴史を学びにやつてきました。私達の切なる祈りがとどいたのか、昨日までの怒り狂つた梅雨の終わりを告げる大雨も快く上がり、有意義な一日が過せようです。

フエイ（　、ボロボロロニ、誰が奏でるのでしょうか。すばらしい琴の爪弾きと共に笛の音が聞えてきます。音に誘われて小田川を東に進みます。いましよう。大きな岩がありました。その上で恰幅のよい老人が縁をせせらぎを愛でながら趣^{おもむき}深げに風流を樂しんでいました。私は心を奪はれるか昔、奈良に都があつた時異国の唐で長年を過ごし、最新の技術、学問を日本に持ち帰つた吉備真備の人です。私はこの偉人に会えた幸運に胸あどらせず、手を差し出しました。

た。元して昭和の今、ここより少し北東に吉備寺という寺があり、墓碑を建ててお祀り致し、郷土の誇りとして多くの人々がお暮り申し上げて、いる由、お話してあきました。又、矢掛とこの眞備に境するあたり、東三成という小高い丘がありますが、この地で一六九年、銅製の骨蔵器の入った石櫃が発見されました。器の蓋には何やら記され、私ども眞備祖母様のお骨が収められていましたが、必ず思つてあります。うち新たる説を唱之る者もあり、時を経た今日に致りましては眞実の程、わかりかねて、います。どうぞ眞剣に歴史を学ぼうとする後学者のため、この地が活気に溌々と湧

(9) 備陽史探訪

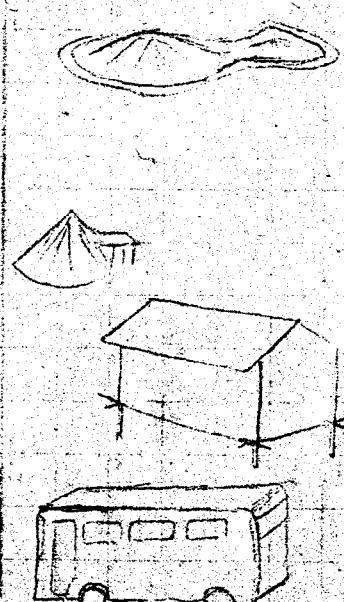
1983年8月30日

ふれ人々が暮らした当時の様子等
含め、一丸ハ三年宛お知らせ下さいま
せ。お頼み致しておきます。

日も高くなりました。阿部さん
御厚意による冷たいビールと甘い
桃で一服、再び元気が湧き出たと
こころで、巨大な横穴式石室を持つ
箭田大塚古墳を訪ねます。中には
誰が収められたか不明の三基の石棺が
何時かに周囲の巨石が何をか言
わん、時ならぬ闖入者に話しかけ
られてくるのです。静かに眠らせてしま
ないでくれ、などなど。

これはほんの一部です。真備町
は多くの歴史の跡を残す魅力に富
んだすべきな町です。

二丸はすすみ、参勤交代の
行列の行きかうここ山陽道の宿場
町矢掛。本日は福山藩主○○様の



あ泊りです。本陣の門を入ると、冷
やりした空気が漂い、全てほんとの
のずつしりした味わいを楽しみながら
ら、長旅の疲れを癒します。
もうとくお話はいつまでも尽き
ることはありません。

ここより疲れの小舟に乗り込ん
で、現在過去をユラリユラリ。そん
な間にバスは無事、我々を福山駅北
口に運んでくれたようです。

皆様、大変ごくろう様でした。又
の日、元気でお目にかかります事を
楽しみに。ではさようなら。

1983年8月30日

覆面潜入取材 ルポ(例会寸評)

その3

阿部厚子の巻

ビールの美味い季節になりまし
た。備陽史探訪の会では例会のないの
後の飲み会を正しくとり行なつて
おります。この飲み会は市民主義
グループたる当会の性格そのままに
に実になごやかなものをとしであり
、最後にはドウモドウモと握手などして
別れるのですが、この一見平和な夏の夕暮
として別れるのです。この一見平和な夏の夕暮
後に恐怖の二次会がとり新あたりで
行なわれていることは極く少數の参加者の他には誰れも知らな
のであつた。

歴史する熱きここと若干飲み足りない気分をもつて参集した陰の委員会の面々はここでは日頃の二コちゃん仮面はやめにして徹底して大眼個人攻撃"バトルロイ"や二ルを開くるのである。組織の真の発展は互いのせめ合ひの中から

以上のお話は阿部さんの例会とは何の関係もない。ただ私のデーターはアイル別名「おもしろ人別譜」には阿部さんに関する資料が余り載つてないからといつて阿部さんがあつたので少しムダ話を入れる必要があるからといつて阿部さんがよく世間にいる「お利口さん」タイプの人だとゆくわけではない。また利口でないのも

1983年8月30日

(II) 備陽史探訪

ない。何を言へとろんだ阿部さん
の印象を一言で言うと、男ならば
好漢といふ最高の称号をさし上げ
たいが女の人の場合これは何と言
えばいいのだろう。とにかく一所
懸命が服を着て歩いていろ様な人
で、この人を見ていると言葉を弄
ふことなど空しい業に思えてくる
から不思議だ。まさしく輝け日本
の高校球児ですネと言おうと思つ
たが良く考えてみると私は高校野
球は好きではなかつたのだ。私は
時々想つけれど今ウチの会を一番
楽しんでいるのは阿部さんではあ
が阿部さんの人気の源泉であるの
だ。

今回の例会では担当者に対する
心くばりが随所に見られた。それ
にても案内役を買って出てくれ
る

た真備町の税務所の人(名前は忘れて
も何故か職業は覚えているのにせ
ぬ)が下調査に出かけたY君にせよ、何故阿部さん
に頼まれるとみんな一所懸命にな
てしまふのだろうか。独断的に言え
ば阿部さんのぢょと困った様な顔
筆者も弱い。このことに関して阿部
さんから是非書いてくれと言わね
ば阿部さん逸話があるのだが、今は書かない。
出たがリ田口の様にみんなから批難
の眼を向けられては困るからであり
、さらに言えば私が困った顔をして
るも誰も同情してくれないからである
。

—

今日は非常に格調の高い文章にな
つて、私など自分で書いてて感動した
てしまつた程である。どうやらこの
木も愛と感動の木で、さすがにアーヴィングの手だ。

(12) 備陽史探訪

1983年8月30日

的で、一マニ着実に近づきつつあるらしい。これもひょえに対象の持つ真摯さによるものであろう。阿部さんには、どうぞ御苦勞様、期待をかけたい。

例回担当ノスメ
以上のように例回を担当して下さった方は天オルボライターである。松官知見仮面が探訪紙上で木メでよく出てさし上げます。一生の良き思い出となります。是非奮て御参画の程を。

九月行事案内

*談話会

九月十日
福山城
演題
講師
会費
金員三〇〇円
会員三〇〇円

*例会

九月十八日(日)

雨天決行

担当者

末森清司氏

目的地

竹原の史跡

ねらい

竹原の文化を探る

集合場所

駄裏

キヤツスル

前

時間

A.M. 8:00

参加申し込み

九月十八日まで

費用

会員 三〇〇円

非会員 二五〇円

で神谷宅まで電話

昼食

各自持參

服装

山歩き出来る服装

その他

編集後記

今回は10月の旅行特集としましていかがでしようか。紙面の都合上Q8Aと寄稿図書、及び末森さんの原稿を載せる事が出来ませんでして本号は三人で手分けして書かれますか御容赦の程を。お願いします。